
旦那様は、オタク様！？

オオトリページ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旦那様は、オタク様！？

【Nコード】

N0439D

【作者名】

オオトリページ

【あらすじ】

和屋杏子は大恋愛の末にジューンブライドにて念願の結婚をした。そして、愛する旦那と甘い新婚生活の日々を送っているのだが…。なんと、この愛する旦那様はオタク様だったのだ！！杏子と旦那の甘い（？）生活を少しでも見せる笑いあり涙ありのハートフルコメディ！？

第1話：嫌になる

嫌になってしまふ。

和屋杏子わや あんこは、ため息をついてしまふ。掃除機を横に置きながらチラリと目の前の棚を見る。そこに見えるフィギュアの群れという群れ…。別段、杏子にそういう趣味がある訳ではない。どちらかというとクマやウサギ等のぬいぐるみの方が好みだ。

では、何故なにゆえに杏子の家に、しかも自室にズラリと並んだフィギュアがあるのか。理由はいたく簡単だ。杏子の所有物でないのなら他の人間の所有物、つまり同居人の所有するフィギュアなのだ。

さて、その同居人というのが杏子にとって何なのかというところ…。

「はあ、旦那もねえ。もう少し、こういう趣味を控えてくれたら…」

そう、一生を添い遂げると誓った相手。旦那又は夫と呼称する相手である。

去年の6月、つまりはジューンブライドにて杏子は大恋愛の末、

愛する相手と念願の結婚をした。

杏子の実家は江戸時代前から（実は、杏子自身いつからか知らない）の老舗の寿司屋で、父親はお決まりの頑固親父。旦那を初めて見せに行った時、色白ヒヨロヒヨロでビン底眼鏡とボサボサの髪（しかも、やたらと長い）だった旦那を見た父親は出逢って一瞬、鉄拳を旦那に喰らわせるといふ事件が起きたくらいだ。

その時の父親曰く。

『娘をくれてやるのは、男の中の男と決まっとつと（訳：決まっている）！！彼氏がいるとか言うけん、どんな男か期待しよったのに…。こげん、（訳：こんな）優男にくれてやる物は塩でも無かつ！（訳：くれてやる塩さえも無い）』

との事で、杏子と旦那の結婚はエベレストの山頂とどこぞの海溝の底の距離よりも遠退いたのだった。まあ、旦那の熱心な説得と買収（？）した親戚の説得が効いて去年の6月に結婚出来たのだが…。

「オタク…。いや、知ってたけど。知ってたけどさあ、やっぱり思わない？結婚したら私がいるから、こういう趣味を卒業してくれるって…？」

しかし、杏子の思いとは反対に旦那のオタクリズムは加速。いまや、杏子にコスプレを強要してくる始末なのである。

「まあ、昨日奴がネコのコスプレを強要してきた時は、鼻に正拳をぶち込んでやったけどさ」

杏子は空手黒帯なのである。ただ、旦那の生命力もかなりの物で一発では諦めてくれなかったが…。それはそれ、技の試しがけに丁度良い。お陰で技のレパートリーが日に日に増えていく。

「結婚前より私、ぜったい強くなってる…」

うきゅきゅー、と杏子は両手を口元に挙げヒョイッと片足を上げる。それは、まるで大好きな彼と目が合い嬉しいけど恥ずかしいという感じの女子高生の様である。

「あ、掃除の続きしなきゃ」

今日の天気は快晴。旦那は会社だが、何だか自分と心が繋がっている様に感じる。杏子は窓を開け、入ってくるそよ風に目をつぶる。早く、帰って来ないかな。駄目駄目でヒョロヒョロでコスプレを強要してくるオタクの旦那であるが杏子にとっては、やはり愛する旦那なのである。

そう、和屋家の始まったばかりの新婚生活はまだまだ甘いのであ

२०

第1話：嫌になる（後書き）

こんにちは。

ええ、書くことはありません（笑）

とりあえず、練習用の小説なので更新は不定期です。こんな小説ですが他の作品同様よろしく願います。

それでは、失礼致します。ありがとうございました。

第2話：羽ぼうきで

羽ぼうきでパタパタ…。

和屋杏子は新婚さんである。去年の6月に大恋愛の末、結婚をした。だが、愛する旦那様は何と…オタク様だったのだ。

「いやあ、良いねえ。メイドに羽ぼうきで頭をパタパタされるのは…。ご主人様、パタパターなんて…」

毎回、何かしらのコスプレを強要してくる旦那。今回は黒服のメイド。それを来て掃除をしてくれるだけで良いからと旦那が言うので、昼間に掃除をしたにもかかわらず杏子は黒のメイド服を身に纏い掃除をする。だが、いい加減に我慢の限界である。

杏子は中学・高校と体育会系の部活に所属していた。つまり、体育会系の女の子はこういう腑抜けた輩を見ると…。

「だあぁっ！！お前、いい加減にしるよな！？あたしゃー、あなたの着せ替えフィギュアじゃねえんだよ！！」

デジタルのカメラではしゃばしゃとメイド姿の杏子を撮っている
旦那に杏子は低空ドロップキックを喰らわせる。

「ふぎゃあ!？」

旦那はドスンとその場に尻餅をつく。

「あわわわわっ、杏子ちゃん? ややや、落ち着いて」

言葉の始めを震わせながら杏子に落ち着いてくれと旦那は手を前に出し体を震わせる。その旦那の姿を見て、まずは、お前が落ち着けよと杏子は思っただった。

「たく、私はお前のフィギュアじゃないんだぞ? 嫁だぞ? 奥様だぞ?」

むぐっと、眉を八の字にして杏子は旦那に訴える。そして、ちょこんと旦那の前に座りぐりぐりと旦那の胸に人差し指を押し付ける。杏子としては、ただ新婚なので甘えて訴えてみただけなのだが…。

「でたあああ!! 黒メイドのツンデロ状態!?! いやいやいやー、やっぱ、コレだよねえ」

旦那のオタク脳は、そう認識せず。杏子の訴えは脆くも打ち砕か

れるのだった。さらに、ぱしゃと杏子の甘えた仕草をカメラにおさめる旦那。いやはや、杏子の怒る姿が撮れているとも知らずに旦那はぱしゃぱしゃと続ける。

「お、おま、お前なあ…。あたしの、私の愛を返せええっ!!」

愛さえ有れば趣味の差なんて…。そう思わない事もなかったのだが、旦那があまりにも駄目男なので杏子は怒る。

全くもって、不条理である。二人は同じ場所で同じ時間に同じ位に愛を誓ったというのに…。

要望が通るのは大抵が旦那の方だ。

ウサウサランド（市内の遊園地）に行きたいと言っても旦那の仕事の都合で行けなかったり、じゃ、別の所でデート、という时必须旦那お得意のオタクスポットになってしまう。他にも、一緒に寝たいのにプラモデルを作るからと深夜まで起きてたり、朝のキスをしたいのにさっさと仕事に出掛けていく旦那。

「なんでコイツと結婚したんだろ？」

不意に出てしまった言葉。別に本気で思った事ではない。杏子にとって、ただ、何となくの一言だったのだが。

「ふえ!?!ええっ!!あ、ああああ、杏子さん!?!うえっ!?!な、

何を、言っ…？いや、いやあ、捨てないで…僕を捨てないでくれええええーん！！」

杏子の不意にでた言葉にわんわんと泣く旦那。まるで、子供だ。ただ、言っている事は子供ではないが…。

「ごめよお、ごめよお。もう、ゴスロリや黒メイドのコスプレを強要しないからあー。捨てないでえ。愛してるよー、愛してるんだよー。杏子がいなくなったら僕は半日でこの世から消滅してしまうよあー！！いいのあ？本当だからねえ、本当に消滅してしまうんだからねえ！？良いかい、僕の脳内はもう八割がた杏子に占められてるんだからねえ？それが無くなるって事は脳死だよ？体があっても死んだだよ？現在の法律では脳死は死んでいる事にはならないけど、僕の場合は本当に死ぬんだからあああつー！！」

意味不明である。旦那の言っている事が杏子にはよく分からない。だが、旦那が自分を深く愛してくれている事は分かる。杏子は何だか気恥ずかしくなってしまう。体がむずむずとしてこそばゆい。

杏子は体育会系で強い。そのためか学生時代から杏子に近寄る男性はいなかった。それに、杏子自身も男にあまり興味が無かったのだより男が近寄らなかった。つまり、杏子にここまで言ってくれる男性は家族意外で旦那が初めてであったのだ。

自分の何処が良いのかと聞いたら『全てが』と言ってくれた旦那。プロポーションは良くても性格が男っぽいぞ、と言ったら『それは君が人一倍女の子だからだよ』と言ってくれた旦那。

「ばか…」

愛さえ有れば趣味の差なんて…。不条理さえも愛になる。そう、新婚さんである和屋夫婦、二人はまだまだ甘くてラブラブなのだ。

第2話：羽ぼうきで（後書き）

こんにちは。

和屋夫婦は面白い関係にあるようで…。杏子は男っぽいけど何処か少女趣味、旦那はヘタレでやっぱりオタク趣味（笑）

そんな二人だけど相手を想い合うのは一緒。中々に良い夫婦かと…？

それでは、失礼致します。ありがとうございました。

第3話：何を言って

何を言ってるウサギさん？

和屋杏子は新婚さんである。旦那はオタクであるが、愛の前ではそんな物は問題ではない。

「妹って、萌えるかな？」

朝方から意味の分からない言葉を繰り返す旦那。妹、妹？確かに、杏子には16歳になる妹がいる。いるが、『燃え』ってなんだ？杏子にはまいち旦那の言っている事が分からない。

「燃え？」

「ああ、萌え！！」

いま二人には、日本海溝よりも深い溝があるのだ。『燃え』と『萌え』の深い溝が…。

「妹燃え？」

「ああ、妹萌え！！」

妹のいる男は『妹萌え』が無いと言うが、どうやら、旦那には妹がいない為か今突然に『妹萌え』に目覚めてしまったようだ。

「杏子、妹って良いよなあ？」

「はあっ！？」

これがいけなかった。オタク用語に『萌え』とでも言うておけば良かった物を旦那が『妹って良いよな』なんて杏子にも分かりやすく『妹に興味あり』と用語を訳してしまった為に…。

「こん不埒もんがあああっ！！」

朝から和屋家は賑やかである。顔やスタイルは抜群に良いが性格が何処か男っぽい嫁がヒョロヒョロ色白ヘタレオタクの旦那にショートレンジアッパーと首投げを喰らわせる程に、この家は賑やかだ。

「妹ってなんだ、妹って！？お前は何か？細胞レベルが同じ位なら若い妹の方を選ぶというのか？それとも、姉妹はセットでプライスレスかつ！？」

只今、杏子の動揺レベルは最高値を迎えている。旦那のいきなり妹萌え発言、杏子による解釈は妹好き発言だが。まあ、とにかくにも杏子は旦那の心が自分から離れたと思い大混乱である。

「浮気者、浮気者、浮気者おー。何だよ、何なんだよ。お前が私の事を好きだって言っただろお？何で今さら妹なんだよおー！？うわーん！！」

杏子はぼろぼろと涙を流す。もはや、彼女には旦那を怒る気力もない。ただ、少女のように泣きじゃくるのだった。

「あー…、いやいや」

口ごもる旦那。彼はいきなり泣き出した杏子に戸惑っているようだ。一体、何が彼女を悲しませたのか、彼には理解が出来ないでいるらしい。

「ひっく、ひっく、ぐすつ。…うう、わーん！！」

一向に泣き止む気配のない杏子。さて、どうしたものかと旦那は

腕を組む。何故、杏子が泣き出しのか。今日は仕事がなく朝方から一緒であるが、まさか、それが原因かと旦那は考える。いや、それにしては朝はともご機嫌であった。その為、杏子はおはようのキスから他愛のないキスを何度も求めていた。では、原因は何だ？

「妹がにやんだああ！！私りゃ、ダメなのかああ！！ぶわーん！！」

妹！？ああ、なるほど。旦那はようやく杏子の不満とする事を理解したらしく。そつと、泣きじゃくる杏子に近づいていく。

彼女は自分の『妹萌え』という発言にショックを受けたのか。全く、そういう事ではないというのに…。旦那は優しく杏子を包む様に抱き込む。

「杏子、そうじゃないんだ。君の妹さんが好きとか嫌いとか…いや、妹さんは好きだよ？好きだけど、それは家族としてって理由であつて」

旦那は優しく杏子に自分の気持ちを語る。ここまで勘違いをしてくれる杏子の愛を感じながら、ゆっくりと『妹萌え』発言について

語る。

「つまり、俺が言いたいのね」

旦那はすくつと立ち上がり、真っ直ぐにダンス棚へと向かう。そこそと何やら何かを取りだしているようだ。

「そう、俺が言いたいの、コレ!」

「…なにそれ？」

旦那の優しいハグ（抱きつき）により少し気分が落ち着いた杏子。旦那が出したものを怪訝な表情で見る。それもその筈、旦那が出てきたものは何やらフリフリの付いた洋服一式。おおよそ、杏子が着ないであろう少女趣味の服である。

「つまりね、妹萌えに目覚めた旦那様は杏子にコレを着て欲しいのですよ」

ニコニコに笑い。旦那は少女趣味の洋服を杏子に差し出す。

それを見て杏子はため息をつく。浮気だ何だと騒いでいた自分が情けない。そもそもこの旦那に浮気をするという甲斐性がある訳が無かった。

「杏子ちゃん！！さあ、レッツ・妹萌えプレイ！！」

新婚さんである和屋家は朝から賑やかである。そう、突然に『妹萌え』に目覚め最愛の妻に妹系のコスプレを強要する旦那に、またかと呆れ果てた妻が投げっぱなしジャーマンを放つ程に、新婚さんである和屋家は賑やかである。

第3話：何を言って（後書き）

こんにちは。

第3話目です。練習用と言っておりますが、ちゃんと練習になっているのかやや不安です（笑）

さて、杏子と旦那の物語りなのですが。どうでしょうか、こんな旦那？私だったら間違いなく願い下げでございます（笑）だって、やりたい放題ですよ？杏子はよく我慢出来るなあ、と感心するばかりです。まあ、旦那は旦那で杏子にかなり依存している所があるので、杏子を幸せにしたいと日々努力しているのでしょうか…。というか、もう少し趣味を控えれば良いのに（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

和屋という苗字は、旦那の方の苗字。つまり、杏子は和屋家に嫁いだという事に…。

第4話：旦那の仕事

旦那の仕事を知らぬは、嫁の恥！？

という訳で和屋杏子は旦那の仕事場を訪れた。まあ、ただ家に一人でいるのが淋しくて旦那に会いに来ているだけなのだが…。それは内緒である。

「北条、相手先に連絡入れといてくれ。関内はこの書類の書き直しをよろしく！」

そう言つて旦那はきびきびと働く。なんと言つかもう、格好良いの一言である。杏子は旦那の仕事ぶりを見てぽおーとなつてしまう。家ではだらしなく、服を脱ぐのにも杏子に手伝いをして貰っている旦那。しかし、今は部下を従えて大きな仕事を一挙に任されているやり手の会社員である。

「和屋専務、先方から例の事で話があるといま下に来てるそうです

が？」

「先方？先方、先方、先方！？…ああ、長田か！？たく、あの会社まだ話たりないのか？しつこいなあ…」

専務という役職につく旦那。専務という役職がどんなポストなのか杏子には分からない。分からないが旦那のお給金からみて…たぶん、かなりの上の位に思える。思えるが旦那の仕事は激務だ。杏子は会社という物は上に行けば上に行くほど楽になると思っていた。しかし、旦那の働きぶりを見る限り楽には見えない。

「杏子、悪いな。昼飯はもう少し後になりそうだ。俺も早く昼休みに入りたいんだがなあ…」

そう言い旦那は杏子の頭を撫でる。旦那は仕事現場では一人称が自宅の『僕』から『俺』へと変わる。というか、杏子と居るときは大体が『僕』という一人称なのだが…。激務の中、旦那の一人称は『俺』のままである。

「うーうん、しょうがないよ。私は大丈夫だから…」

そう言い杏子は首を横に振る。旦那の優しい笑顔。凜々しくて逞

しい、仕事場の旦那。その中での旦那の優しい笑顔。杏子の胸の鼓動は止まる事を知らない。ドキドキと激しく鼓動が鳴り響く。

いま自分はどんな顔をしているのだろうか？杏子は自分の顔が真っ赤になっている事に気付いていた。だから、もっと凄い事になっているのでは、と杏子は心配する。旦那は知ってか知らずか杏子の頬をそっと触り、仕事に戻る。

旦那の仕事はやはり激務である。

時計は午後1時半を回る。この旦那が働く会社の昼休みは午後1時半から始まり午後2時に終わるという極めて珍しい会社である。

「いやあ、あと30分しかないよあ？」

旦那はケラケラと笑いながら杏子の手を握る。

「仕事…忙しそうだね」

あまりの旦那の働きぶりに、杏子は淋しくて会いに来た事を恥ずかしく思う。旦那はあんなにも頑張っていた、しかし、自分はどうだ？ちよつと淋しくなったからといって家事を投げ出し旦那に会いに来てしまった。嫁として失格である。杏子とはとととビジネス街を歩く。

「あれ、らしくないなあ？杏子ちゃん、杏子ちゃん、杏子ちゃん？」

もしもしと旦那は杏子の顔の前で手をヒョヒョイと振る。

「んん？杏子は何が食べたい？和食？中華？洋食？」

杏子とは対照的にニコニコと笑う旦那。先程までの凛々しく逞しい旦那とは別人のようである。

「そうだ、杏子はオムライスが大好きだったよね？ここに上手い洋食を食わせるお店があるんだよ、行ってみない？」

そう言い旦那は杏子の手を引つ張り走る。それは時間が残り30分だからではない。杏子が何故か暗くなっているから。だから、旦那は杏子を引つ張り走るのだった。

新婚さんである和屋家の旦那。彼は仕事に一所懸命であり情熱を持っている。だが、それ以上に彼には一所懸命、いや、一生懸命な事がある。それは生涯愛すると誓った相手。和屋杏子を幸せにする事。そう、和屋家の旦那は杏子にメロメロなのである。彼女の笑顔の為ならば全てを捨ててもよいと考える程に…。

第4話：旦那の仕事（後書き）

こんにちは。

旦那の会社登場。ただ、何の会社かは不明（笑）

さて、更新不定期とか言いながらも第4話目です。小説の書き方が上達したかどうかはさて置き、和屋家の熱々度（ラブラブ度？）は上昇しっぱなし。

今回は旦那の方にもスポットが当たっています。旦那がどんな人間なのか、杏子をどう思っているのかが分かる話になっていると思います。

それでは、今回はこの辺りで失敬致します。ありがとうございました。

和屋家の旦那はエリートさん？ただ、杏子の前では駄目夫？（笑）

第5話・浮気とは…

浮気とは…

- ・心がうつわついていること。心が落ち着かず変わりやすいこと。
- ・陽気で派手な気質。

・男女間の愛情が、うつわつて変わりやすいこと。多情なこと。他の異性に心移すこと。

∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴

「浮気？お兄さんが？」

「…うん」

綺麗に掃除された部屋。フローリングの床には地味ながら高級感溢れる絨毯が敷かれている。そして、いまだ片付けられることの無い、冬特有のコタツ。綺麗に掃除された部屋であるものの、4月になったばかりだというのに和屋家には春らしい部屋模様は一切見られない。

「ま、またまた？お兄さんが浮気だなんて杏子お姉えわ…。だつ、だってだって、お兄さんはお姉えにいつもベツタリだったじゃないですか？もう、そりゃ、ウザイくらに…」

セーラー服を着た少女はそう言いパタパタと手を振る。しかし、杏子は俯いたまま一言も話しをしようとしない。どうやら、冗談ではないようだ。

「な、なんでそう思ったですか…というか、浮気（？）してるって気付いたのです…？」

「…けえーたい」

「けえーたい？…携帯電話？」

「旦那のケータイを見てたら…スケジュールのところに『アイミちゃん』と、はーと』って書いてあった…」

「（アイミちゃん？何、その名前？本名？本名なのですか？かなり、そちら系の名前なんじゃ！？はっ、フーゾク！？まさか、お兄さんフーゾクに通っちゃってるんです？えっ、え？お兄さんお兄さんお兄さん！？）」

セーラー服の少女は杏子に聞こえないように小声で何やらぶつぶつと呟く。姉の旦那はかなりのオタクだ。だから、アニメやゲームの女性に現を抜かすことはあっても、まさか、現実の女性に現を抜かすことは無いと姉も自分も思っていた。

と、いうか。姉と結婚する際に自分たちの父親である頑固一徹寿司屋のヤクザ親父に初対面で殴られ、結婚の挨拶で日本刀を突き付けられ、式後で視線だけで人が殺せそうな睨み付けを喰らうという、障害を越えてまで手に入れたはずの姉を裏切るなんて……自分も含めて誰も思ってみなかつたことである。

（んん、でも、これで分かったです。何故、いつも明るくて幸せいっぱいだったお姉えの家が、こんな冬越えが出来てないような位に暗くなっているのか…）

少女はコンビニで買ってきた板チョコをパリッと一口食べるとスクツと立ち上がる。

（私が……。私が明るくて幸せできらきら輝いていた杏子お姉えとお兄さんの結婚生活を守らなくちゃっ、です！！そうなのです、この私、柏木七海が 私の理想の夫婦であるお姉え夫婦を守るのですのヨ
！！）

和屋家の妹・柏木七海^{かしわぎ ななみ}16歳。只今、探偵見習い・修行中。

第6話：まず、探偵…

まず、探偵といえば…

「ユ サクっすよ、ユウ クーやっぱ、私立探偵っていったらユ
サクさんしかないっすよ、部長！」

「うっ、うっさいですよ、阿久津くん！ ウサク、ユウサ って、
あの人は探偵というより警察の方が有名です。なんじゃこりゃーっ
が有名なんです！」

和屋家の妹・柏木七海^{かしわぎ ななみ}は、看板の影に隠れながら同じクラスで同じ
部活の阿久津^{あくつ} 当夜^{とくや}と探偵について語っていた。

「まったく、分かってないですよ。ユウ ク先生は憧れても、真似
しちゃダメなんですよ、阿久津くん。あの人は役作りの為に自分の
足を切っちゃおうとした人なんですよ？ 私たちに真似なんて出来る

訳ないですの。特にヘタレキング・阿久津当夜くんにわ…」

「ヘタレて…キングで…。俺、この部長に着いて行って大丈夫なんだろうか…」

「あつ、動きました。監視対象が動きだしましたよ、阿久津くん！何をそこで地面に話しかけてるんですか？探偵といったら尾行ですよ、尾行！我が神社高校・探偵クラブの出番です！」

「て、部長の姉夫婦の旦那浮気調査でしょ？他の皆は近所で起きた窃盗事件の方に行っちゃいましたよ？つきしょ、ジャンケンで負けなきゃ、俺も向こうで色々…部長と二人つてのがどうもなあ…っ…」

「いいから、ウ・ゴ・ク・です…！」

七海の姉夫婦はとても仲が良く、七海にとって理想の夫婦であり、その姉夫婦の住む家はとても居心地が良かった。常に清潔で、いつも爽やかな風が入ってきていて、空間がそこだけ異世界のように幸せに溢れていた。

小さい頃からガサツで、男勝りで、おおよそ料理や掃除、洗濯なんて女らしいことをしたことの無い姉。しかし、結婚してからはそのが一変して毎日毎日、家を掃除して、料理をして、洗濯なんかもして、それはもうお嫁さんとしては完璧であつた。人は変われば変わるものだなあと七海自身そう思うくらいだつた。

掃除嫌いだつた姉は部屋の模様変えなんかも、季節毎にやっていて、春なら春らしく夏なら夏で秋なら秋で冬なら冬の内装に飾り付けていた。何が嬉しくてそんなに部屋を季節毎に模様変えするのか。きっと、これが不器用な姉の旦那さんへの愛情なんだろうな―と、七海は感じていた。

そして、数日前、七海はそんな幸せいっぱい春いっぱいの姉夫婦の家に訪れることとなつた。当然、姉は春になつた今、部屋を春らしく飾り付けていると思い、やって来た七海。だが、なんと驚いたことに内装がいつもと一緒に冬の内装であるではないか!?

先ほども言った通り、七海の姉は結婚してからというものの部屋を季節毎に模様変えをしている。しかし、いまは4月。春になつた今、いまだ家が冬の内装というのはどういうことなのだろうか?この異常事態に七海は驚き、姉である杏子に一体これはどういう事なのかと問いただした。

「なるほど。で、部長がお姉さんにそれを聞いたところ、旦那さんが浮気をしている、と…?」

「です!」

「で、それを聞いた部長は我が探偵クラブを私的に利用して、旦那さんを調査しようと、尾行していると…」

「です!」

「……………部長、旦那さん、見失いましたけど?」

「ですーっ!?!?」

…
…
…
…
…

…

見失った姉の旦那を探すこと数十分。携帯電話を調べ、居場所を特定した七海。

「…なんすか、このオタクの聖地は…」

「あ、秋葉原では無いですよ…ね？でも、玩具やゲーム、フィギュアや……エログッズ!？」

「エログッズって部長。あれは、恋愛ゲームですよ、恋愛ゲーム。しかし、知らなかったなあ、こんな所にオタク道があったとは…」

「えっ、何？オタクロード？」

「いや、俺の仲間内で言ってるだけなんですけどね？アキバ以外のオタク街の事をそう呼んでるです。アキバがオタクのメッカって事はそのメッカを辿る道がある訳でしょ？だから、アキバ以外のオタク街をオタク道って事で…」

「辿るですか？オタクは皆、その道を辿ってアキバを目指すですか？」

「いや、そんな西遊記みたいなの…。別に辿ってアキバに行くんじゃないくて、アキバ以外をそう呼んでる訳で…」

そう言い阿久津はキョロキョロと周りを見渡す。そこら中にオタクが泣いて喜びそうなグッズを売る店が所狭しと並んでいる。アニメやゲームのポスターが店先で貼られているのは当たり前で、マニアックな店では子どもにとって悪影響だろうとツツコミたくなるようなポスター等も貼られていた。

「んん、お兄さんのケータイを調べて位置を特定したはいいけど、まさか、こんな所にいるとはです」

「かなりのオタクですね、部長のお兄さん」

「義理ですけどね…」

ふう、と七海はため息をつく。まったく、あの義理兄ときたら姉を困らせてばかりである。とりあえず、街のエロエロなポスターを横目に義理兄を探すことにする七海。

となりの阿久津は、というと『おお、すげえ、これ幻の同人ゲームじゃね?』、『やべつ、今日って京都瞑想の発売日だったんだ!?!』、『げえ、なんだよこのフィギュア?かなり、クオリティー高くな?表情とかマジ自然!』などというたわ言を言って義理兄を探す気がないようである。

人選を間違えた。七海は義理兄の影を追いながら心の底からそう思う。

阿久津はこう見えて学校での成績は優秀で探偵としての能力も、難解な事件にて警察から直接アドバイスを求められるほど優秀であった。そんな彼だからこそ義理兄の浮気調査に役だってくれると思っているのだが…。

「おおっ!? スゲー、アレは破格の値段で異例の売り上げを記録した、超激レア18禁 PCゲーム『アイマシテ』じゃねえかあああっ!? やつぶえ、アレってあまりの人気にどこも売り切れだったんだよな、買わにやならん、男として、アレは買わにやならんだろ!」

「（人選を間違えた…です）」

第7話：帝王・柏木七海！！

「しかし、お兄さんはどこにいますの？準・秋葉原を徘徊しているのは確実なんですけど……」

「うえっ、あれはカードリスト修羅のレアカード!？」

「こいつは、探す気がゼロですの……」

準・秋葉原街に来て一時間後。浮気容疑のかかっている七海の義理兄はいまだ見つからない。

「むいっ！なんですの、このオタクオタクした道は!?!ム力つくです、癪に触るです!なんですの、この猛乳娘って!?!乳があるからって有り難がっているんじゃないですの!乳が無くても女の子は女の子ですの!っ!オタク嫌い、オタクキモい、オタク暗いですの!っ!……!」

「いや、オタクが悪い訳じゃ…」

「ウルサイですよ、オタクキング！略して、オタツキン！」

「ヘタレキングからオタクキングにーっ！？…いや、いいかも。むしろ、そののがオツケー？」

「何を悦に入ってるのです！？オタツキンが嫌なら、ハゲちゃびんですーっ！？」

「グレード下がったあーっ！？部長、オタツキン、オタツキンでお願いします。てか、俺、ハゲてねえーっ！！」

何やらぎゃーぎゃーと騒ぐ七海と阿久津。周りのオタクたちは二人を居た堪らないといった感じで暖かい視線を送る。きっと、オタクたちは二人の姿を見てこう思ったのだろう。

学生服のカップルがあまりのオタク文化にカルチャーショックを受け、混乱しているんだ。そうだ、そうに違いない。そつと、そつと、しておいてあげよう……と。

「あつ、この猛乳娘くださーい！」

「にゃーっ！？誰ですの？言っただそばから猛乳娘を購入しようとしている、ド馬鹿は誰ですのーっ！？」

「おつ、和屋さーん、来たねー。猛乳娘ね、毎度ありーっ！」

「……………」

「部長、オタツキンで、オタツキンをお願いします。何なら、オタツキーでも可でって……部長？」

七海はあまりの出来事に動くことができない。ここはとあるオタク

道。阿久津いわく、オタクのメツカである秋葉原以外のオタク街を
そう呼んでいるらしい。シルクロードとかと勘違いしていると思わ
れる。そして、そんな中。そんなオタク溢れる道で七海は信じられ
ない物を見る。

「ふふふん、ふふふん、ふふふん。お休みはー、買い物をして
く、ストレス発散、発散！今日は、猛乳娘を、買いました」と……」

そこに居たのは紛れもなく七海の姉・和屋杏子の旦那様である和屋
そついちめい
宗一郎、その人であつた。

彼は事もあるうちに、貴重なお休みを使つて、嫁である七海の姉・和
屋杏子とデートするでもなく、嫁である七海の姉・和屋杏子の為に
宝石の類を買うでもなく、なにやら如何わしいパソコンゲームを
買い漁りに来ていたのだ。しかも、買ったのは七海が先ほど、タイ
トルやコンセプトに激怒した猛乳娘。七海は心の底から思う。

（此奴、どうしてくれようかつ！？）

この男の浮気疑惑を晴らす為に自分が部長をしている探偵クラブを
私的に使用してまで浮気調査を決行したというのに……。猛乳娘を買

いまだだと？お休みは買い物をしてストレス発散、発散だと？ふふん、ふふん、ふふふふんだとおおつ！？

七海の怒りは限界寸前。阿久津はそんな七海の憤怒の表情をみて、なにやらオロオロとろたえ気味である。

「ぶつ、部長、な、ななな何かのみ、飲み物を買いますね？ここコッ！？コーラでいいですね？」

「炭酸なら何でも良いですのっ！！」

「うわわーい！じゃ、そそその自販機で買ったきますねねっ
…」

あまりにも恐ろしいオーラを発する七海から逃げるべく阿久津は素早い動きで目の前のゲーム屋に置かれた自販機へ向かう。

「ええと、百円、百円。しかし、何を怒ってるんだ部長？わかつんねえー、んん、あんな時の部長には近づかない、オア（もしくは）、ご機嫌を取る！これに限る、うん、うん！」

それから、己の今後の命を保証する為に、彼女のご機嫌を取っておくべきだと、無類の炭酸系ジュース好きな彼女の為にコーラを一本仕入れようとする。

「……っと、百円見つけ、て、うおっ！？俺の百円が落ちちまった？
こら、待て俺の百円！」

だが、その時、阿久津愛用の細長の財布から百円硬貨が見事に飛び出し、アーチを描いて地面に着地。その後も縦に着地した為にコロコロと転がる百円硬貨を追って阿久津は一步、二歩と足を前に出す。

「……と、ホイ、百円」

「あつ、ありがとうございます」

すると、その落とした百円を拾い上げ様と阿久津が手を伸ばしたと同時に何者かの手が百円を拾い上げ、ポンとそれを阿久津に渡した。

それはなかなか背の高い男性であった。しかし、髪の毛は前髪が目

を隠すくらいに長く、今どき珍しいビン底を思い浮かばせるレンズのした眼鏡をかけた男性だ。

「おや、君が持っているのは、もしかして、あの破格の値段で異例の売り上げを記録した幻の同人ソフト『アイマシテ』ではないかい！？」

「あつ、分かります？今さっき、そのゲーム屋にあつたんですよ！いつもいつも探してたんですけど、どこも売り切れで、偶然見つけて衝動買いしちゃいましたよ？男ならこれは買わにやならん！って思いまして、あはは」

「うんうん、分かる。分かるよ、君の気持ち！俺も探したもんだよ、言っても手に入れたのは最近なんだけど、そのソフト。かーなり、凄いよ？」

「まつ、まじすか？」

「うん、俺さ、幼なじみの香月美代までクリアしたんだけど、かーなり泣かせる！他の娘の話もマジ泣き必死のストーリーだからあゝ」

「うわあゝ、やぶえゝ、早く帰ってやりてえゝ！」

阿久津はジタバタと地面に足踏みをする。にこやかに笑う男性はそんな阿久津に色々とゲームに関する話をし、阿久津はその話の一つ一つに感嘆の声をあげて叫ぶ。

すると、ふと、阿久津は何やら背中を刺すような視線に気付く。このプレッシャーは一体！？阿久津は背中に背負う恐怖心にも似た感覚を心に押し込め、ゆっくりとプレッシャーのする方向に顔を向ける。

「（アゝクゝツゝクゝン！？）」

恐怖！？

まさに、その一言に尽きる。一体、何が起きているのか？学生の身ではあるものの探偵として数々の事件を解決してみせた自称名探偵・阿久津当夜だが、しかし、これは理解出来ない。

何故なのか、しかし、それは確かに具現化する事実であった。先ほどから恐怖で空間を支配する部長。その部長が更なる恐怖を持って、見たこともない怖い表情でこちらを見ているのだ。

（ひひいいい！？何が、何が、何が部長をあんなにも怒らせいるんだー！？）

これには冷静さを欠かない阿久津でも無惨に取り乱してしまう。学校では、その愛らしさとクールな仕草からクールプリーティーやら愛玩の（女子の間で部長は仔猫扱いなのだ）プリンスなどと呼ばれている彼女。しかし、中学時代からの付き合いである阿久津にとって、そんな名前は彼女には相応しく無いと思っていた。

確かに、彼女は可愛い。それはそれは、絵本の童話に出てきそうなお姫様みたいな姿で、まさしくプリーティプリンスといった感じだ。しかし、阿久津は知っている。神社高校探偵倶楽部の部長・柏木七海の心の内には秘めたる帝王が棲んでいる事を…。

帝王とはつまり、『カイザー』。王、『キング』とは違い、己の道をただひたすらに突き進むが絶対主である。その為ならば、親しきものだろうと邪魔な者はその暴虐の名の下に排除する。己の障害・敵となる者を徹底的に滅しようとする。それが『カイザー・帝王』である。

そして、そんなカイザーが柏木七海の心の内に棲んでいる。それ故に彼女を怒らせるといふ事は、果てしない苦しみと痛みを味わう事となるのだ。

現に中学一年の夏休み。阿久津は彼女に、彼女の苦手なカエルを触らせるといった、ちよつとしたイタズラを試みせた。当然の如く、カエルが嫌いな彼女は今にも泣きそうな叫びと共に逃げ惑った。イタズラは大成功であった。

だが、しかし、その翌日の朝。阿久津はその仕返しとして、思いもよらぬトラウマを植え付けられる事となったのだ。『真夏の田んぼとカエルの卵』、これが阿久津当夜が一生背負っていくであろうトラウマのキーワードである。

（何故だ、何故に部長は俺に、ガンガン殺ろうぜ！…みたいな視線を送り付けてくる！？お義兄さん探しを手伝わなかったからか？いや、しかし、手伝わなくてもそもそもこの事件の真相は…）

「ん？どうした少年？汗なんかかいて？」

「いへっ、なっ、なんでもないです…」

「そうだ、少年、ちよつと俺に付き合わないか？いま、ゲーセンにいいアーケードゲームが入ってた。今日、俺、それをする為にここに来たんだ」

「いえ、そんな、俺、用事がありますし…」

阿久津は心の中でひたすらに叫び続けていた。まずい…本当にまずい。これ以上、この男性と長話をして部長を怒らせるとマズイことになる。そして、このまま、この男性に付き合い、ゲーセンにでも行こうものなら…。自分は、一生ゲームが出来ないであろうトラウマを植え付けられることになる。阿久津は本気で心の中でそう思う。

「ん、もしかして、他人だからとか気にしてる？馬鹿だなあ、オタクは皆同志！遠慮することはないってえ」

（違うチガウ、遠慮じゃない、遠慮じゃない！くそ、なんで俺がこんな目に？原因は？部長を怒らせてしまった原因はなんだ！？）

「あつ、名前教えるね。俺の名前は和屋宗一郎っていうんだ。ちなみに、去年の6月に結婚して、只今新婚生活を満喫中さっ！」

（原因はなんだ、原因はなんだ、原因は…和屋？…あれ、確か、部

長のお姉さんの名字も和屋？てか、あれっ？もしかして、この人。
眼鏡かけて髪の毛を下ろして顔がいまいち見えにくいけど……さっ
き部長のお姉さんの家の前に立っていた、旦那さんじゃね？）

阿久津は混乱していた。

先ほど部長のお姉さん宅前で見た、旦那さんはちゃんとスーツをビ
シッと決め、前髪も上に上げ、エリートビジネスマンをも思わせる
出で立ちであった。しかし、何がどうなったのか、今自分の目の前
にいる旦那さんはアニメのロゴと絵が描いてある服にジーンズと猛
乳娘が入ったビニール袋を抱えた、まるっきりオタクなスタイルな
のだ。

「てっ、猛乳娘ええっ!？」

「えっ？あっ、うん。いま、この店で買ったんだけど……？」

（分かった……。いま、部長が何故にあんなに怒った表情をしている
のか……やっと、原因が理解出来た。つまり、つまり……）

阿久津はフラフラッとおぼつかない足つきで和屋家の旦那から離れ

る。『えっ？ちよつ、どうしたの？』と和屋家の旦那。阿久津は叫んでいた、心の中で氷解した事件の原因について叫んでいた。

（原因はコイツだあああーっ！！）

第8話：列伝！和屋杏子！！（前書き）

第7話からいきなり話が飛びますが、繋がっています。とりあえず、杏子と旦那の今昔物語り！

第8話：列伝！和屋杏子！！

最初の出逢いは高校時代。最初に旦那と出逢ったときに感じた感覚はとても『変』な感覚だったことを覚えている。

「結婚しよう」

これが私、和屋杏子の人生を大きく変えた一言であった。その言葉が言われたのは、旦那である和屋宗一郎が当時、大学二年生で私は高校を卒業するかしないかに差し掛かった所の時であった。

旦那との出逢いは、別にロマンチックでも何でもないただの家庭教師と生徒の関係。私が部活に夢中になるばかりに勉強の方が全く着いていけず、高校二年生の時に留年をしそうになった為に、家庭教師として旦那がやってきたのだ。

初め、旦那はやる気のあるのかないのか分からないといった感じで私に勉強を教えていた。まあ、その時の私もその方が楽でいいやと思っていたのだが、突然、旦那は私に聞いてきた。

「君、夢ってある？」

当時の私の反応は『何、言ってんだ、このジジイは……？』と感じ。しかし、旦那はかなり本気だったらしくしつこく私に夢があるかと聞いてきたのだ。

どうやら、当時の旦那は私がやる気のなさそうに勉強をしていたから、自分もそんな私のペースに合わせ勉強を教えていたらしいのだが、あまりにも私がつまらなさそうにしていたのが気になったらしく。私の興味を引くために、夢はあるかと聞いてきたらしいのだ。

当然、当時の私には夢などなかった。目標としては高校の空手大会で三年連続優勝を目指していたが、留年するとなると話が別になってくる。そのために私には確たる将来の夢というものがなかった。

「まっ、そうだな。あたしに好きな事をやらしてくれて、食わしていつてくれる旦那でも見つけることが夢かな？」

これが、あまりにもしつこく夢について聞いてきた当時の旦那へ言

った言い訳の夢である。

「なるほど。でも、そんな奇特的な男性は地球のどこを探したっていないだろうね？」

「はん、どうかな？あたしは今ハガサツに見えるかもしれないけど、ちゃんとすればそこその女に見えるのさ！だから、ちゃんとすれば、あたしを食わしていつてくれる旦那なんて、すぐ見つかるさ！？」

「いつ？」

「あつ？だから、ちゃんとすれば現れるって言って」

「そうじゃなくて！いつ、君はちゃんとするんだいってこと？留年してから？空手大会で優勝してから？それとも、人生の最後でひとりぼっちになって死んでしまう時！？」

「はっ？何、言ってるのアンタ？」

「いつかする、いつかする、そんな事を言っただけ何もかも後回しにしていたら人生は暮れてしまうよ？ちゃんとすれば、君の好きな事をさせて食べさせられる旦那さんは現れる。でも、つまりそれは、ちゃんとしないと現れないって事だろ？勉強だつてそう。いつか、いつか後回しにしていたら物覚えの悪い年寄りになってしまう。今なんだ、するべき時は！思い立ったらとまでは言わないでも、早めにしておいて損することは少ないと思う。逆に後回しにすればするほど、人生を損することになる」

驚いた。今までやる気のない家庭教師だと思っていたら、実はその逆。この旦那は熱血教師だったのだ。

それ以来、私と旦那はよく口喧嘩をするようになる。価値観も違えば、性別も、生活の場も違う。だけど、当時の私にとってそんな口喧嘩の出来る旦那はとても安心出来る存在だった。

真面目に私の事を考えてくれて、真面目に私と正面切つてぶつかってきてくれる。気付いた時には私は旦那に恋をしていた。

いつからなのか。当時の私には分からなかった。と、いうか、まず当時の私は恋という感覚すら知らなかったのだ。最初に会った時の『変』な感覚がどんどん大きくなってきて、次第に私の心臓の全てを押し潰そうとしていた。

これは、あとから妹の七海に聞いた話なのだが、私が旦那と初めて会った時から、どうやら私は初対面の旦那に対してかなり高圧的だったようだ。これは私が思うに最初に感じた『変』な気持ちがある恋という感情だということを理解できなかった当時の私が、ただただ、そんな思いをさせる旦那に噛み付いていつていたのではないか。

そして、そんな私がその『変』な思いが恋だと気付くには、かなりの時間がかかった。そして、それが恋だと気付くきっかけを作ったのが、旦那のプロポーズの言葉であった。

成績もそれなりの物になり、ちゃんとした大学にも推薦で入れて貰えることにもなった高校三年の夏。皆が必死に受験勉強をしているなか旦那のプロポーズに私は顔を真っ赤に俯いていた。

シュワシュワシュワとセミが鳴く、暑いあの日。

「なんで？なんで、あたしにそんな事を言うの？」

「なんでって…いや、その、杏子ちゃんの事を好きになってしまったから…。いや、本当は言うべき事じゃないって分かってる。大学二年生にもなって女子高生にプロポーズなんて非常識だし、犯罪だし、変態だつて事も分かってる。……でも」

「でも？」

「君と一緒にいる内に気持ちを抑えられなくなってしまつてきて…。ははっ、実はさ、今だからついでに言っちゃうけど……一目惚れつてやつなんだ……」

「そんな素振り、一度も見せなかった……のに？」

「いや、そんな素振りを一度でも見せたら、俺は杏子ちゃんの家庭教師をクビにされちゃうよ！？だから、一生懸命バレないように隠してた…出来れば、杏子ちゃんが成績を上げて、大学に推薦で受かるくらいになるまではって…。それで、それが出来たら、そのまま、家庭教師を止めて…」

「止めて、あたしの前から居なくなろうって!？」

「……うん」

「ふざつ、ふざけんなよ、テメエ！？止めて居なくなる？あたしに何も言わずに？そんな事したら、お前をどこまでも追っていつてギッタギッタのボッコボッコの」

「いや、だから言っただじゃん。まあ、結局、俺は君にこの気持ちを伝えずに消えることが出来なかっただけの話なんだけどね。ははは、君に毎回毎回、偉そうなこと言って、結局俺が一番駄目な人間だった……。ゴメンね、俺の言ったこと、全部忘れて。家庭教師も君のお母さんに今日限りで終わりにしますって言ってるんだ」

「はあっ？何、勝手なこと言ってるんだよ？あたしの事が好きなんだろ？あたしと一緒に居たいんだろ？だったら、居ればいいじゃないか？私と一緒に居ればいいじゃないかっ！？」

「それが出来たら、俺はこんなに悩まないよ……」

正直、今でもあの時の旦那の気持ちが理解出来ない。好きならば、迷わずに好き合ってしまったえば良いのに……。ただ、当時の旦那はそれを良しとせず、そのまま、私の前から姿を消してしまった。

「ふざけんな。ふざつけんなよ、あの野郎！？一目惚れのくせに、ヘタレのくせに、臆病者：臆病者：臆病者おおーっ！！思い……知らせてやる。思い知らせてやるんだから、あの馬鹿に……あたしは、あたしはっ、あたしはーっ！！」

さあーっ、その後が大変、大変。

ちゃんとした大学の推薦が決まっていた当時の私は、なんと、その大学への進路を蹴ってしまった。もちろん、母親にも頑固一徹寿司親父にも怒られる始末。しかし、当時の私には確たる将来の夢があった。だから、真っ直ぐ真っ直ぐ、夢に向かって突き進んでいく覚悟なのであった。えっ？どんな夢かって？そりゃあ、決まってるでしょ！！？

「あたしの夢は、あたしの好きなようにさせてくれて、あたしを食わしていつてくれる、素敵な旦那さんをゲットすること！！さしあたり、あの馬鹿のいる大学に合格することが、あたしの目標だああーっ！！」

うん、後半に続く!!っと(笑)

第9話：列伝！和屋杏子！！（後編）

あれから、数ヶ月後。不良で、空手の部活ばかりしていて、成績不振で、男な女の昔の私はついに念願の大学に入学をした。

そう、私は推薦の大学を蹴り、母親と父親に怒られながらも、念願の大学に入れたのだ。

当時、高校の担任をしていた先生からは、奇跡だ、奇跡が起きたとか、仲の良い親友からはアンタ良く途中で投げ出さずに勉強したわね？とか言われた。

だが、当時の私にとって、そんな事はどうでも良いことだった。だって、当時の私の夢は何も大学に入ることで無いのだ。私の次の目標、そう、将来の夢はその先にあるものなのだから。

全国的にも水準の高い、七草大学。海外からの先生や留学生も多く、社会的によく採用される大学の生徒No.1とまでされる優秀な大学である。スポーツも盛んで、割かし大会での優勝率が高いようだった。

「ん、でも、やっぱ、アンタよく途中で勉強投げ出さずに頑張っ

たわね？あたしゃ、嬉しいよ！小・中・高・大学とアンタと一緒に通えるなんて、うんうん、杏子、アンタ、本当によく頑張った！」

「いや、仁美に嬉しいがられても……」

「なにおう！？この口か？そんなイケずな事を言うのは、この口かあ？」

「あはははは、ちょっと、やめてよ。分かった、分かった、あたしも嬉しい、あたしもアンタと同じ大学で嬉しいから……」と、あつ！すいません、ぶつかっちゃって、大丈夫ですか？」

「ありやりや、すいません、杏子がぶつかってしまって、お怪我はありませんか？」

「ちょっと、仁美が言うことじゃ……あ……わ、和屋先生？」

「えっ？あ、杏子ちゃん！？」

この再会は神様のイタズラか、はたまた悪魔の成せる偶然か……。いや、実際、どちらでもない。確かに、大学に入って直ぐにこんな形で高校生の私から姿を消した旦那に再会出来たのは神様のイタズラか悪魔の偶然かのどちらかかもしれない。でも、その確率を上げた

のは、そのきっかけを作ったのは、他でもない私自身であった。

旦那が私の前から消えた日。私は心の中で何度も何度も誓った。絶対にあの人がいる大学に受かってやる、どんなに頭の良い学校だろうと、あの人がいるのなら受からなければならぬ。

恋する事を初めて知った当時の私はとても純粹だった。ただ、もう一度あの人に会いたくて、ただ、もう一度あの人に話しかけてもらいたくて。

意地っ張りな私は、旦那の家に行くなんて事は出来なかった。家も知らなかったしね。だから、旦那が通う大学に自分も通うようになれば…。

確率は天文学的数字になるかもしれない、いや、もしかしたら、確率の世界ではかなりの高配当で出逢えるかもしれない。

私はそんな思いを重ね重ね、七草大学に受かるよう勉強をした。時間が短く、投げ出そうと考えたこともあった。だが、その都度、聞こえてくるのだ。

『結婚しよう』

旦那が言ってくれたあの言葉。もう、あの人は忘れているかもしれない。実はただ最後の最後で冗談を言っただけかもしれない。そんな思いが頭を過るが、結局、当時の私は投げ出した参考書を机に戻し、黙々と勉強の続きをするのだった。

そして、遂に、遂に当時の私は愛しの旦那と再会した。時間にして数ヶ月。だけど、当時の私は、もう何年も何年も会っていないような錯覚に陥った。

「えっ？なんで、なんで、杏子ちゃんがうちの大学に？す、推薦の大学は…？」

「えへへ、ごめんなさい、先生。推薦の大学…蹴っちゃった！」

「けっ、蹴っちゃったって…。せつかく、苦勞して手に入れた推薦だったのに…」

「でも、いまはその蹴っちゃった推薦の大学より、もっと頭の良い七草大学に合格したよ？」

「えっ、合格した？えっ、じゃ、杏子ちゃんは、この大学の新人…」

「先生が悪いんだからな！先生があたしにあんな事言うから…。本

気にしたんだから、あたし、本気なんだから!!」

「ふえ!?! 本気? な、何が...?」

「むっ、先生、殴るよ。いい、聞いてよ。もう、あたしは高校生じゃないし、先生の生徒でもない。つまり、あたしと恋愛したって...」

「っあ!?! いや、いやいやいや、いや、待つて! 待つて、待つて、待つて! あれは、ええと、その... あっ! 一時、そう、一時の迷いで、だから、そんな本気されても...」

「えっ?」

「杏子ちゃんも、もう大人なんだから、そこん所、ちゃんとわきまえ... ブギャツ!?!」

まあ、これが私が旦那に初めて、奮った鉄拳制裁だったかな。旦那のこのあまりにも腑抜け言葉に心底頭にきて、気付いた時には旦那の顔面に正拳突き。鼻血を放ち、旦那は真後ろにぶっ倒れる。その後の騒ぎは尋常じゃなかった、人が殺されたのだ、改造人間だの、過激派のテロ行為だの。

まあ、結局、旦那が大学側に根回しか何かをして、私は事なきを得るのだが、当時の私はそんな事では気が収まらない。

大体、乙女にプロポーズしておいて、冗談だなんて、本当に冗談じゃない。私は旦那の家を調べて、突撃することに……。いやあ、昔の私はなんて無謀……いや、希望に溢れていたんだろうねえ。

「むつ、ここが和屋先生の家か……デカイな……」

いや、本当にビックリした。初めて旦那の家に行った私が見たものは、庭という庭が永遠と続くかのように広がった塀と、そのかなり奥にたたずむ有り得ないほど大きな家。なんと、旦那様のお家は江戸末期から続く大富豪の家系でらしたのだ。いや、マジ、驚いたね。

「むう、こんな、あたしだって直ぐ建てられもんね。頑張れば、先生をお城に住まわせることだって出来るもん」

おおよそ、大学生とは思えない言葉。勉強はそこそこ出来るようにはなった当時の私だけど、社会的に経験の少ない当時の私はまだまだ心が子どもであったのだ。

「うんと、よいっしょ、つか、なんて高い塀だよ、侵入するのにも
「苦労って……」

「いや、別に堂々とお客様として入って頂いて結構ですが？」

「うわあっ！？あつ、あああ、アンタ誰？」

「私はこの和屋家に代々仕えます執事の中村と申します。それで、
お嬢さん、和屋家にはどういったご用件で？」

「わ、和屋宗一郎先生に会いにきたんだ！」

「ご学友でいらっしゃいますか？」

「うえっ？あつ、えっと、その、ご学友って言うか、あの……うん
と……」

「……、分かりました。では、七草大学ちかくのメゾン・カタナシ
の201号室に行くといいですよ。この屋敷にはここ数ヶ月、宗一
郎坊っちゃんも帰ってらっしゃいませんから……」

「えっ？なんで？だって、ここ和屋先生の家なんじゃ……」

「私の口から、それを言うのは憚れます。直接、ご本人から聞いて頂くと良いかと。それでは、失礼致します。……あつ、お嬢さんも早く行かないと警備の者がやって来ますよ。防犯センサーが動きだしました、いまの和屋家は少々、荒れていますからね……猫が屋敷に入っただけでセンサーが動く。さつ、後は私が適当に言い訳しておきますから、行ってください」

この時の旦那の家は色々と問題を抱えていたようで、父親と折り合いの悪かった旦那は、遂に家を飛びだしていた。その後も、色々と旦那と旦那の父親とはいざこざがあったのだが、とりあえずはそれは省いておこう。

さて、和屋家の執事・中村さんに言われて大学ちかくのメゾン・カタナシにやって来た私。あのドデカイ屋敷から、かなりグレードが下がってボツロボツのアパート。住んでいるのは、どうやら旦那以外、誰もいないらかった。

「……ぼろつ。ん、201、201、201と……あつた！和屋宗一郎……」

ボロい階段を上がって、やはりボロい二階廊下をちよつと進んだ所にある当時の旦那の部屋。私は深く、深く深呼吸をしてドアを叩く。

「……………で、出てこない？てっ、ふざけんな！せつかく、あたしがあんな遠い屋敷にまで行つて、それでこの大学ちかくのボロいアパートまで引き返して来たっていうのに、居ないってのはどういふことだぁーっ！？このっ、出てこい出てこい出てこい、出てこーいっ！！」

「なーっ！？うるさい、そんなにバンバン、ドアを叩かなくても聞こえてるよ！どなた！？」

「にゃあっ！？」

「……………誰もいないじゃない？あん、イタズラか？」

「うっ…しろ。ドアの後ろを確認しろや、ゴラッ！？」

「ん、後ろ？…………あっ！な、何をしてるの、杏子ちゃん？」

「とりあえず、アンタがいきなりドアを開けるから、モロ顔面にドアがぶつかった所かな…………」

「そ、そう…………」

「……………」

「……………」

最悪の再再会である。せつかく、当時の私がおもいきって旦那の家まで押し掛けに行ったというのに、顔面にドアは無い。しばらく、私たちの間を沈黙が支配する。そんな沈黙の中、先に口を開いたのは旦那だった。

「どうしたの、こんな夜中に……？」

「……………した？本気で言ってるの？」

「えっ？」

「先生、あたしに言ったよな！？好きだって、気持ちを抑えられなくて、結婚…しようって……だから、だから、あたし頑張って、頑張って先生のいる大学に入ったのに！入ったのに！！……一時的に迷い？なんだよそれ、馬鹿みたいじゃん、あたし……」

「……………」

「……………」

「……………一時の迷いじゃないよ」

「っ！？そう言ったじゃん！？大学で久しぶりに再会した時、先生、あたしにそう言ったじゃん！？」

「いや、あんまり、突然だったから……」

「じゃあ、結婚……して、くれるの？」

「……………ゴメン」

「なんで！？一時の迷いじゃないんでしょ？じゃあ、あたしのことが好きなんでしょ？あたしと一緒に居たいんでしょ？だったたら、あたしと……！」

「俺の家さ……………」

「えっ？」

「俺の家はさ代々、金持ちの家系なんだ。でも、俺はそれが嫌いだった。父親は何が楽しくて、働いているのか。家庭をかえりみず、金、金、金、金！それでも、実の父親だからさ、我慢してた。いつか、分かってくれる。いつか、振り向いてくれるって……。キャッチボールもしたことの無い、親子なのにだぜ？それでも俺は親父に父親を期待していたんだ」

「それと、結婚出来ないのと、どう関係あるの？」

「あるよ。ここ数ヶ月前、うちの会社が大きく傾いたんだ。他のデカイ企業が昔からふんぞり返っている和屋家が邪魔に感じたらしくてさ、いわゆる、潰しつてやつさ。ははっ、会社じゃない、屋敷にまでバンバン電話が鳴りっぱなし、かなりヤバい状況だったかな。そして、悪いことは続くもんで、今度は母親が倒れたんだ。まあ、精神的にかなり参ってたらしくてさ。それでも、入院をしないとならない位、重病で……」

「……………」

「ここからが本題さ。入院した母親は、ご飯も食べずに、どんどんやつれていつてさ。だから、俺は倒れた母親の見舞いに来て欲しいって、ちよっとでも顔を見せるだけでもいいって親父に頼みにいつ

たんだ。そりゃ、会社が傾いて忙しい時期だつて分かつてたけど、父親なら、夫ならさ、普通は少しでも会いにくはずだろ？でもさ、ははっ、そんな時、親父はなんて言ったと思う？」

「なんて言ったの？」

「『役立たずに用は無い』ってさ……。そこで、俺はキレちまった。気付いたら、親父の襟元を掴んでボコボコにしてた訳さ。親父は血まみれ、警備員は騒ぐは、執事たちは俺のことを怖がるは……」

「……やっぱり、分かんない。なんで、それで、先生があたしと結婚出来ないって事になるの？」

「俺にもあんな親父の血が流れてるから。しかも、俺は親父を血まみれにしたんだぜ？きつと、俺もあんな風に君を傷つける。家庭もかえりみないで、夫らしいことも、父親らしいこともしないで……都合が悪くなったら力に飽かせて、君や子どもたちを傷つけるに決まってる。俺は怖いんだ。せつかく、作った幸せを自分の手で壊すことが……だから、君とは結婚できない。いや、俺は誰とも結婚をしない……」

当時の旦那は、父親を求めた所を裏切られ、そんな父親を自分の手で傷付けた事に後悔をし、重度の人間不信に陥っていた。可哀想なことに、明るく振る舞う中で心で哭いていたのだ。とても、切なか

った。ニコニコと私に『自分はまともじゃないからさ』と笑いかけている当時の旦那。それを見て当時の私は、本当に心が締め付けられる思いになった。

「いいよ…」

「えっ？」

「和屋先生……うんうん、宗一郎さんが夫らしいことが出来なくて父親らしいことが出来なくて、それを力に飽かせて正当化しようとしても、あたしはかまわない……」

「そんな、かまわないわけ…」

「だって、宗一郎さんがそんな腑抜けた事をしたら、あたしが逆に『顔面に一発』入れてやるもん！」

「……………はっ？」

「コブラツイストだって、牢固めだって、フランケンシュタイナーだって、投げっぱなしジャーマンだって、バンバン大技をかけてやるもん。大丈夫、あたし強いもん！宗一郎さんなんて、力づくであたしの言いなりにしてあげる！それに…」

「それに？」

「あたしには分かる！あたしと宗一郎さんとなら、いい夫婦になれるって分かるもん。だって、だって、貴方は、あたしが好きになった人だから！！」

確して私の旦那捕獲作戦が実行されたのだった。大学でのストーカ
ー行為……もとい、ラブアタック！は当たり前でボロアパートに押し掛け女房や夜這い行為まで！！

結局、私の既成事実作りに旦那が観念して私たちは付き合うことになるのだが……まあ、そこら辺は、さらに次回に続く（笑）

第10話：話進みて、寿司オヤジ（前書き）

途中、（訳： ）など文章がかなり読み難くなっていますが、一応必要な物なので勘弁のほどをお願い致します。申し訳ございません。

それでは、本編へどうぞ。

第10話：話進みて、寿司オヤジ

遂に私は旦那のハートを射止めてやった。人間不信になっていた旦那を口説き落とし、大学でのラブストーリーが始まったのだ。

「ふんふんふん、ふふん

「こ、ご機嫌だね、杏子ちゃん？」

「ええ〜？だって、ねえ〜？……あつ、待っててね？すぐご飯作るから」

「いや、うん。…と、いうか、俺、自分で自炊出来るし、別に毎日毎日、ご飯を作りに来なくても良いよ？」

「遠慮しない、しない！あたしが作りたいの！未来の旦那さまのご飯だもん！」

「そつ、そつね…」

毎日毎日、旦那のアパートに通っては手料理を奮ってあげた。まあ、料理なんて生まれてこのかたやった事の無かった当時の私な訳で。母親から教わって作っていたものの、不器用な私の作った料理の味は想像を絶する物だったに違いない。良くもまあ、旦那もその全てを完食してくれた物だと今でも感心している。愛だね、愛。

「えっ？あんたマジで和屋センパイと付き合ってたの？」

「うん、毎日、手料理を作りに行ってるんだあ」

「毎日って、夕飯でしょ？夜でしょ？」

「うん！」

「うん！って、あんた。マズイわよ、あんた変なことされてないで
しょうね？」

「てか、もう…ねえ？」

「いや。もう、ねえって言われても、あんた……。だって、いい加減男だよ？部活でも、ぐうたらしてるし、狭間センパイとは何かオタクな会話してるし、単位は取れてるみたいだけど、あれだよ？髪の毛ボサボサで厚底メガネで秋葉原みたいな所を徘徊してるような男だよ？」

「よ、要は仁美はオタクが嫌いなんだね？」

「あんたもそうでしょ？中学の時、クラスのオタク野郎を見る度に絞めてやったの覚えてる？高校の時だって、あんなの見るだけで蹴りが飛ぶ杏子だったでしょ？」

「むっ、昔は昔だよ」

「……………」

「あの、仁美？……えっと、その……むっ、昔は昔だよ？」

「……………はあ、まあ、杏子が好きになった人だからねえ。仕方ないか、幸せにね？てか、あの男が裏切ったらまず私に言いなさ

い、懲らしめてやるから。それから、別れたい時も言うつのよ？後腐れなく、ゴミに出してあげるから！」

「ゴミについて…」

「で、あんた家族には言ったの？特にあの頑固なお父さんには話したんでしょね？」

「モツ、モチロンだよ……」

話せる訳が無かった。我が父親は昔気質の頑固一徹を思わせる堅い人。仁美が言ったように当時の旦那は髪の毛ボサボサのビン底メガネ。紹介しようにも、出来る訳がない。

家庭教師として面識のある母親と妹には会わせる事は出来るが、そこから漏れないとも限らないので家族全員に内緒。ちなみに、何故に父親が旦那と面識がないかというと、前も話した通り父親は寿司屋なので朝イチから河岸に魚を買いに行き、夜遅くまで店で寿司を握っているの、夕方に来て夜には帰る家庭教師時代の旦那とは母親から話しに聞いても会うことが無かったのだ。

そして、もし家庭教師時代に2人が会っていたらならば、あんな事件も起こらなかったかもしれない。

あんな事件。それは、私と旦那が付き合い始めて約2年の歳月が流れた時の話だ。

「ねえねえ、杏子お姉え。彼氏が和屋先生だって本当ですよ?」

「ぶっ!?!いつ、いきなり何!?!」

この妹の食卓でのいきなり発言が事の発端であった。

「いや、昨日、偶然に和屋先生と会ってしまっただけ。おかしいと思っただけです。2年ぐらい前から、いきなり、お姉えがママに料理を習い出したり、いつも散らかしっぱなしだった部屋を自分で片付けてたり。これは、なあ、なんかあるなあと思っただけ、ズバリですの」

「ぐっ、あんた、また探偵ごっこして、あたしをつけ回したな!?!」

「「」ってではなく、探偵ですの」

「んな事どうでもいいっ！！重要なのは……」

「杏子がどきちゃん（訳：どんな）男と付き合っとるか、が重要たい
！！」

「いや、お父さん。あのね、別にね……」

「和屋先生？何ね（訳：何だ）、その和屋先生って言うとは！？」
訳：言うのは）教師ね、教師と付き合っとつとね！？（訳：付き合
っているのか！？」

「あらあ、和屋先生って言うたら杏子が高校時代に付いて貰った家
庭教師の先生じゃない？へえ、やるじゃない杏子ちゃん」

「母さん！あのね、お父さん、宗一郎さんはね……」

「宗一郎さん！？」

「宗一郎さんですよ?」

「あらまあ、宗一郎さんですって。まあまあまあ、今日はお赤飯が良かったわねえ」

「母さん!じゃ、なかった。お父さん、あのね、和屋さんはいい人で、頭も良くて、七草大学も適当にしながらも卒業なんか出来てるし…」

「適当っ!?」

「あっ!いや、別に和屋さんは適当な人じゃなくて…」

「なるほど。お姉えが高校の時、推薦が決まった大学を蹴ったのも、そうまでして七草大学に入学しようとした事も、おかしいおかしいとは思っていましたが。なるほど、なるほど、七草大学に和屋先生がいたから、あんなに必死になって勉強してたのですの?」

「まあまあまあ、じゃ、杏子ちゃんが高校生の頃から?まあまあま

あ、やっぱり、お赤飯作らなくちゃ！」

「あゝ、もう！そうじゃなくてえ」

「…杏子」

「なっ、なに、お父さん…」

「明日、その男をここに連れて来い！良かね！？（訳：良いな）」

さあ、大変な事に。そんな事を急に言われたってこっちはまだ心の準備が出来ていなかったし、旦那を着飾る時間もないと来たもんだ。再会した当時の旦那はオタク文化に毒されており、普段からオタクなスタイルでいるため、父親に会わせるなんて無謀としか言い様が無かったのだ。

しかも、大学も卒業出来、就職先も決まり、春休みを満喫中の当時の旦那は私が知る限りで今まで一番、最悪のスタイルだった。親友の狭間センパイと同じ格好であちらこちらと変な所に渡り歩き、も

はや、百年の恋も冷める勢いだつた。……まあ、それでも、呼び出したんだけどね。

「なんでそんな格好なの!？」

「いや、そんな急に呼び出されたから。それでも、一応、服は着替えて来たんだよ?」

「むう、ボサボサ髪の毛は後ろに縛るとして…なんでメガネ!?コンタクトはっ!？」

「それがどこにも無くて、探したんだけど…」

「まあ、どうすんのさ!?あたしのお父さんは頑固だつて言ったじゃん!?うう、別れるなんて言われたら、どうしよう…」

「大丈夫、信じて!」

「信じられないよ!……ううっ、でも、もうこれで行くしか…」

「杏子？店先で何ばしよつとね？（訳：何をしている）はよ、入らんね？（訳：早く、入らないか）店の中からお前の姿が見え……」

「おつ、お父さん！？うわつ、なんでいきなり？あの、あのあの、これがあたしの付き合っている人で、家庭教師をしてくれた人で、あの、和屋宗一郎さんって言って……」

「どうも、和屋宗一郎です。お父さん、挨拶が遅れてしまつてどうもすみまつ、ぐはつ！？」

「ふえええつ！？なつ、なななな、なんでいきなり、宗一郎さんを殴る訳、お父さん！？」

「せからしかつ！！（訳：うるさい！！）娘をくれてやるのは、男の中の男と決まつとつと（訳：決まっている）！！彼氏が出来たて言うけん、どんな男か期待しよつたに……。こげん（訳：こんな）、優男にくれてやる物は塩でも無かつ！！（訳：くれてやる塩さえもない）」

この時ほど、父親との血の繋がりを強く感じた事はない。父親の無遠慮かつ、暴虐な鉄拳を喰らった旦那は、やむ無く父親と会話することなく帰宅する。その後、旦那と父親が出会うことは無かった。そして、2人が次に出会うこととなったのは、結婚の挨拶の時だった。

「……………」

「……………」

「（ねえ、パパと和屋先生…2人向き合ったまま全然喋らないですの…）」

「（うう、やっぱり、2人だけににするんじゃないかった）」

「（……………大丈夫よ、きっと……………）」

「（きつとって、なに？きつとって、母さん？）」「

「（一番危ないのは、あそこに昔から飾ってある名刀・右京一文字ですの。パパがとある有名な刀鍛冶に特注で作って貰ったやつですの。確か、値段は国宝級。ですから、一度も人を切った事は無くても、切れ味は、それなりに……ですの）」

「（まっ、まさか……）」

「それで？」

「……先ほども言いました通りに、娘さんを頂きたく参りました」

「……………最初に会った時よりは、幾分かマシな着物を着とるばつてん（訳：着ているが）、中身はどぎゃんかね。（訳：中身はどうだろっな）」

「お答えしかねます。俺は、中身も無くて見栄えも悪い。直ぐに怠けるし、服装だって適当です。お父さんの言う、男の中の男とは程

遠い。……しかし、杏子さんを思つ氣持ちなら、誰にも負けません」

「誰にも……だと!？」

「はい!」

「貴様、俺よりも杏子の事を思いよるとでも言いよるつもりか!？」
(訳：思っていると言つのか)「

「……はい!」

「きさまーっ!」

「（あわわわ、パパが刀に手をつきましたのです? ひゃあっ、刀身を抜いちゃいましたのですのゝっ!?!）」

「（えっ、ちよっ、宗一郎さん? 逃げっ、逃げて、逃げてっ!?!）

くっ、こうなったら、あたしが行かなきゃ……」

「（大丈夫よ、杏子ちゃん）」

「（お母さん、どこが！？大丈夫じゃないよ、刃先を宗一郎さんの目の前に突き付けてるんだよ！？）」

「貴様、俺から杏子を無事に奪えるて思っなよ！？この刀のサビに……」

「片腕でも、片足でも、差し上げましょう！」

「なにいっつ！？」

「いくら切られたとしても、俺は娘さんを連れて行きます。もはや、彼女は俺の一部だ。彼女が居なければ、俺は生きてはいけません。だから、彼女を失うくらいなら、腕や足の一本二本……惜しくは無

い！！たとえ、例え、首だけになったとしても、俺は杏子を愛して、奪ってみせます！！」

「こんガキヤあつ！！なら、望み通り、貴様の首をつ……」

「待った！！」

「っ！？母さん邪魔ばせんでくれ！俺はこいつば、叩っ切るけん！」

「そんな事をすれば本当に貴方の負けです」

「なにいゝっ！？」

「彼は首だけになつてもと言いました。つまり、彼が生きていようといまいと、杏子が彼と一緒にいる事は免れないという事です。むしろ、彼をここで首だけにしてしまえば、杏子も彼の後を追ひ、首だけになってしまうでしょう。杏子を不幸にする事は貴方の本意では無いでしょう？」

「んぐっ…」

「彼が杏子を思つ覚悟を見せた所で貴方の負けは確定してしまつたのです。もう、誰にも2人を止めることは出来ませよ？ねっ、あなた？」

「……………」

「あなた！！」

「くっ……す、好きしろっ……ばってん、（訳：しかし）貴様！杏子は泣かしたり、裏切ったりした時は……覚えておけよ！」

こうして私と旦那は親公認で結ばれる事になる。その日から去年の6月までせつせと結婚の準備をして、そして、めでたくゴールイン。相も変わらず、旦那はオタクだけど、愛は常に私の方に向いているとその時の私は信じて愛を誓ったのだった。

さて、途中途中、省いた話はあるけれど、とりあえず、これが私と旦那の昔話。

大好きで、愛して、信頼して。それでもって、憎らしい旦那様。本当に、もう嫌になってしまふ。消えない思い、消したくない思い。後から後から沸いてきて、本当にどうしようもない思いがここにある。だから、私は今も昔もずっとこれから、旦那に恋をして生きていくんだろう…。

…
…
…
…
…
…
…

「…ぐすっ」

時は土曜日、お昼過ぎ。私は今朝から出掛けている旦那を待っている所だ。そして、ちょっとした事に、ナーバスになり戸棚からアルバムを引っ張り出して昔の事を思い出していた。

「もう、お昼過ぎだ。旦那…帰ってきちゃう……ご飯作らなきゃ…
…でも、帰って来ない……よね？」

だって、今日は旦那の携帯電話のスケジュールに書いてあった、浮気の日なのだから…。

『アイミちゃんと、ハート』と書かれた携帯電話のスケジュール。それを見た私は直ぐさまソレを叩き折ってやろうと携帯電話を振り上げた。しかし、結局私には出来なかった。

旦那がオタクなのは我慢出来た。あまりにも多すぎるマンガで1部屋潰れているのも。フィギュアの群れが私たちの寝室にまで侵入してきた事も。休みの日、デートもせずに溜めに溜めたゲームやアニメを見ている事だって。さらには、デートをするにあたってそのデートの場所が何かオタク系統のイベント会場であっても我慢出来た。

しかし、しかしだ。流石に、そんな私でも浮気には…。もう、涙を流しその場に座り込む他、どうしようも無かった。

鼻歌まじりでお風呂に入っている旦那。携帯電話を握りしめ、そんな旦那のいる風呂場を見る私。この書かれたスケジュールについて聞こうか、聞くまいか。もうすぐ、旦那がお風呂からあがる。聞く。聞いて殴って、許してやろう…。

『ふう、いいお湯でした。ん？どうしたの杏子？』

『えっ！？うつ、うんうん？何でもない……何でもないよ、うん……』

『…ふーん』

いつもの私なら、間髪入れず殴っているはずなのに、何故か私は何事もなかったように夕飯を作っていた。今思い出しても情けない。動揺、していたのだろうか？その日から私は旦那の顔が真っ直ぐ見れず、ぎこちなく過ごしていた。そして、遂にその日がやってきたのだ。

「旦那の浮気…か」

切ない。苦しい。悲しい。寂しくて淋しくて、嫌になる。今から旦那の居る所にいって浮気をしている所を押さえて、その浮気をしている女の目の前でボコボコにして……

と、そこまで考えて、ため息が出た。いくら考えた所で体が動かない。言い様のない脱力感が私を襲うのだ。刻々と時が進み、私だけが置いてきぼりにされる。…本当に、本当に切ない。

「浮気って、何ね？（訳：何だ？）」

「浮気っていうのは、旦那が他の女と逢い引きをして……ん？
って、おっ、おおおお、お父さん!？」

「杏子、浮気っていうのは何ね？（訳：何だ？）浮気しとつとね（
訳：浮気しているのか？）、宗一郎くんは？」

「いやっ!…いやいや、いやっ、いやっ!…してない、してない、
してない!…宗一郎さんが私を置いて他の女と浮気なんて……てか、
お父さんどうして？」

「お前の顔ば、見に来たったい。だけど……そうね、浮気しとつと
ね？（訳：しているのんだな）……あん（訳：あの）、ろくでなし
がっ!…!」

何？何なに、この展開！？何ゆえに我が父親が私の家に？てか、今の一人言聞かれた！？ヤバい、旦那……殺される！？

第11話：唐草模様

むかゝし、昔、とある所に1人の男が居おりました。その男は古くより続く武術家の家系の嫡男で、その家は武術家とは名ばかりの『任侠』を重んじる極道の家の一族なのでありました。なので男は、やはり凶暴で、悪という悪をやり散らかして、それはそれは立派なヤクザが一匹、出来上がってしまったのでした。

『赤松の白竜』

人はその男をそう呼び恐れ、男は人にそう呼ばせ、それはそれは恐ろしい悪魔へと変貌していったのでありました。

男は何より戦いが好きでした。特に血が飛び交うような戦場のような戦いが大好きでした。白竜の名の下に白いスーツを着込んで、日本刀を片手に、幾度となく敵対する暴力団関係組織に喧嘩を売りに行き、そして、帰る頃には、その着込んだ真っ白であつたはずのスーツをどす黒い色のスーツに染めて、ほくそ笑むのが彼の日課でありました。幾度となく繰り返されるそれは、街をも巻き込む大事件となり、街は血で血を洗う地獄と化していったのでした。やがて、その抗争は男の配下に付く敵組織という王者の図が出来上がり、街は文字通り、男の支配下に置かれてしまうのでした。彼が仕切る街は惨然とし、誰もが暗い影を落とし、下を向いて生きていくしかありません。もはや、男を止める者は居りませんでした。もはや、この地獄を救う手だては、ありはしなかったのです。

そして、数年後：

男は組織の跡目を弟に譲り、ヤクザをやめたのでした。

何故、男が急に巨大な組織のボスをやめたのか、それは組織の誰にも分かりはしません。ただ、見つけたのです。男は見つけたのです。金より、力より、権力よりも、大切にしたい『極道』を、彼は見つけたのでした。

∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴

「それで？どこに居るとね、あの男は？」

ああ、まずい。いや、本当にマズイ事になってしまった。新婚さんである和屋 杏子は思った。確かに、確かに、旦那は浮気と思わしき疑いのある事をしていた。携帯電話の予定表なんかに『女と会う』なんて約束事なんぞを書き込んでいたりしていたが、だが、そ

れは真実なのか？

今になって嫁である杏子は、とある不安を抱えて考えこんでいた。

「カーーツ！？…あん（あの）、男は、杏子ば、嫁に貰い来た時に、何んて言つたか、忘れた訳じゃあるまいなあっ！？」

何やら、細長い物を入れた唐草模様の布を振り回しながら、和服を着こんだ初老の男・杏子の父親である柏木 竜ノ丞は怒り心頭であつた。それを横目で見て、娘である杏子は、ズササーっと自分の頭から血の気が引いて行くのが分かった。あ、やばい…ヤル気だ、この人。

もちろんの事、旦那が本気で浮気なんかをしているものなら、それは嫁としては許せない。いや、もはや、許す許さないの問題ではない。命を絶たせるか、させないかの問題である。……現実的には冗談であるが、そういうくらいの気持ちなのである。が、だが、彼は違う。この、自分の父・柏木 竜ノ丞は、違ふのである。

その手に持った唐草模様の細長い布端。たぶん、それは日本刀。中身を出せば悪即斬の武士の武器。彼は、やるだろう。必ず、実行するだろう。自分と同じ血。いや、それよりも濃い血を持つ父は、旦那が浮気をしている現場を見たものならば……

「杏子っ……！」

「ふあ、は、はいっ！？」

「もはや、彼奴めを追うことは無いな！？裏切り者に対して、お前

も命をかけて追うことなんぞ無いわっ!」

「えっ、いや、あの…おとう、さん?」

「今宵の我が自慢の刀……ちよいと斬れ過ぎるやもしれんなあ……」

(ああ、やばい。時はまだ昼過ぎ、なのに今宵なんていつてるよ
よよよっ……)

ひたすら、杏子は心の中で旦那が無実であることを願うばかりなのであった。

第11話：唐草模様（後書き）

こんにちは、久しぶりの更新です。なんとかまだ頑張っ
て書いてお
ります。

さて、和屋家のお嫁さんの父親・柏木竜ノ丞。前半のパートで何や
らきな臭い話を書いてあるのですが、この後どうなる事やら…例に
よってアイディアはありません（笑）
どうしよう…

第12話：帝王さまは、御立腹

オタクにはオタクにしか分らないモノがある。いや、そのオタクの中でも同じ種類の仲間でしか分かりえないモノがある。例えば、『鉄』だ。鉄道マニアである彼らにも、種類がある。物体そのものに興味がある者、その中で、その走る姿、停まっているフォルム、写真、中身、乗ることに興味があるもの、そして、その物体でなく時間、つまり時刻表などに興味をそえられる者など、人それぞれである。本物ではなく、ミニチュアなどに魅入られた者や、天命を終えて廃車となった車両の部品などを集める者たちも居るのだから、それはもう、オタクという言葉で定義・肯定するにはあまりにも趣味・主張が枝分かれしているのである。まあ、マニアとオタクを同じに位置付けるなど、各々方面からご意見が来そうだが、趣味に集める執念は同じことである。

「それで、なにが言いたいのですか、阿久津くん？」

「ですから、どうやらその理論から行くと俺と部長のお義兄さんとは、同じ趣味・主張の者らしいのです」

言いながら阿久津は、尾行する和屋家の旦那が向う方へと指をさす。

「つまり、お前も『猛乳娘』が好きと……！？」

バギリと部長・柏木七海は手に持っていた袋を握り潰す。

「はわあっ!？」

それに、阿久津が声にならない声で魂の叫びを叫ぶ。何故なら、七海が握り潰したそれは、さきほど阿久津が買い求めた幻の同人ゲームであつたからだ。

和屋家の旦那と偶然に接触してしまった阿久津 当夜。彼と和屋家の旦那との一連の会話を聞いていた七海が『そのゲームってそんなに面白いものなんですか？ちょっと、見せてください』と言ったので、阿久津は彼女にそのゲームを渡していたのだ。最初は、パツケージに未成年にはあまり好ましくないイメージが描かれているので、阿久津も渋っていたのだが、にっこりとその可愛らしい笑顔で『先ほどの私のストレスを阿久津くんで発散しても良いのですけど？』と脅された日には、阿久津も渋々とゲームを渡すことしか出来なかつたのであつた。

まあ、予想通り、『なんですか、このゲームわっ?』、『大変です!?!いえ、変態です!?!』などとさんざん喚き散らした後、『巨乳ばかりです……むっ!?!』と、そのゲームをどこぞに投げ捨てようと振りかぶつたので、話題を変える為に自分が七海の義兄と同じ趣味の人間であると阿久津は別の話題をと切り出したのだが、結局、ゲームは怒った七海に握り潰されてしまったのであつた。

「で、巨乳が好きな阿久津君?お義兄さんと同じ……が、何ですか?」

やや不機嫌気味に七海が、潰れた幻のゲームに涙を流す阿久津に先ほどの言葉の意味を問う。と、それに涙を流していた阿久津がビクリという大きな反応を見せる。なぜなら、聞く七海の視線が尋常では無いからだ。冷たい。どこまでも冷やかな視線で阿久津を凝視する七海。

「いや、別に巨乳が好きな訳じゃ、いや…」

「……………」

「!？」

幻のゲームを壊されて意気消沈の筈の阿久津なのだが、そんな事には構ってはいられなかった。どうにか、しなければ…。この部長、この帝王の、ご機嫌を取らなければ…。自分は死ぬ。決して大げさでは無かった。この七海の冷やかな瞳は語っている。『オマエガ、キライダ』と…

「お、俺はむしろ、ちっちゃいのが好きです」

「……」

「……」

「……」

無言。冷やかな視線と冷たい空気が阿久津を襲う。

（くっ！？まだだ！まだ、あきらめちゃだめだ！！）

しかし、そんな冷たい雰囲気にもめげずに、阿久津は不屈にもさらに言葉を繋げる。

「ぶ、部長ぐらいのが俺は好みです。有るような無いような……」
「つるぺた」なのが、俺は」

瞬間、阿久津の顔が真っ赤に燃える。

（あれ？なんだ？これ？あえ？あえあえ？）

声が出ない。言葉が出ない。咽がからっからに干からびていく。ごくりと唾を飲み込むものの、それでは咽は潤わない。ときどきと動悸が息苦しい。天才・阿久津と呼ばれた頭脳の思考が停止する。名探偵・阿久津。スパコン（スーパー・コンピューター）^{ブレイン}頭脳・阿久津。呼ばれたあだ名が廃るほどに思考が働かない。代わりにドーパミンが成りアドレナリンへと変わり、動悸を激しくする。

「…つまり、私が貧乳だと、阿久津君！？」

「！！！？」

ああ、終わった。真っ赤に燃える顔が、真っ青に冷めて、阿久津当夜はしっかりと己の最後の時をその明晰な頭脳で感じ取ったのであった。

第13話：ヤバイ予感？

アニメやゲームの世界を現実の世界に持ち込む者がいる。それが、少年少女ならば世間は文句を言うまい。では、それが大人ならばどうか？ 大人がコスプレをして憧れのヒーローになっていたとしたら世間はと思うだろう。大人が、魔法を使えるんだと言っているならば世間はと思うのだろうか…

「どう思う？」

「別にいいんじゃない？ 他人に迷惑をかけなきゃ？」

そう、たぶんそれは良くも悪くも、その人次第である。趣味を保つ人が居る一方で、犯罪に走ってしまう人もいる。要は、どうあるかが問題なのだ。

「まあ、奥さんにコスプレ強要するのは、犯罪だよな？」

「いつから!？」

ただの変人なのか、子供のころの思い出が忘れられないだけなのか…。きっと、この時代が重なることに増えていくだろう。ゲームを忘れられない大人。アニメを手放せない大人。

「うーん、俺は止められないなあ…50になっても……」

「そこはやめとけ人として…」

「…いや、お嫁さんへのコスプレ強要の方じゃないよ!？」

「なんだ…」

「……」

本来は子供向けである筈の娯楽を手放せない大人。だが、それは問題ではないのだ。面白いものは面白い。子供向けだって、大人はむかし子供だったのだ。大人になるに連れ、そういうものが無くなつていく人もいる。

でも、逆に必要になつて来る人もいる。それが、現実。では、そん

な世の中、彼ら、または、彼女らはどうあるべきか？

「和屋クンは、どう思っのかな？」

「ワタシは、世間の言う所の問題を起こさなければ多少の自由は良いかと思うよ、狭間クン？」

「ほう？」

つまりは、夢を忘れずに現実を忘れずに、節度ある行動を…ということ。働いて、アニメ見て、働いて、ゲームして、働いては趣味をする。コスプレしたって、成りきったって、趣味だもの。社会のルールに大きくはみ出さず、犯罪に手を出さなければ、ちょっとやそつとは自由なのだ。大人が子供の玩具で遊んじゃイケないなんて法律は無いのだから…。

「まあ、最近は大人向けの玩具がいっぱいあるけどね…」

「狭間くん、その言葉がなんか危ないよ」

∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴

さて、どうしたものか？和屋家の旦那を尾行していた、その義妹・柏木 七海。先ほどから見ていると、何やら姉の旦那は友人と、ゲームセンターで待ち合わせをし、二人並んでアーケードゲームをしている模様。しかも、そのゲームをしながら何やら意味不明な会話を繰り返していた。

「あ、阿久津くん…か、解説を…」

七海は先ほどボコボコに殴って、ぐんにやりとゲームセンターの

一角でうな垂れている阿久津　当夜に今の会話の通訳を促す。

「……ぐふっ……」

しかし、もはや風前の灯の阿久津は痛々しい擬音と共に落ちていった。

「ああ、もう。役立たずです」

更なる問答無用の無能のレッテル。阿久津の口から再び痛々しい擬音が放たれる。

「むう、見えませんねえ……お姉えの言うには、今日、お義兄さんは浮気相手と会うはずなのに……なぜ、ゲームセンターなんかに来たのでしょうか?」

もはや完全にボクサーもびっくりのグロッキー状態の阿久津だが、七海は無視してゲームセンターの奥に居る義兄の様子を伺う。

ゲームセンターという場所は特殊な場所。特に、ある一定の人には好ましくない一面のある場所である。

「尾行は、ややアレでしたが…いまだ完璧です。なので、お義兄さんが女の人と出会う場面はまだないはずですよ…やはり、腑に落ちませんね」

そう、七海の義理の兄である和屋 宗一郎は、まだ浮気相手である女性とは接触してはいない。そして、今日出会うという姉の言葉を信じれば、この後その問題の浮気相手と出会うはずなのだ。なのに、何故に、和屋 宗一郎は、ゲームセンターなんかを訪れたのだろうか？

この後のイベントを考えれば、男子たるものこういった行為は避けないければならないはず…。ゲームセンターとは即ち、立ちこめる匂いのする場所。つまり、多かれ少なかれ、タバコの匂いという異臭が服についてしまう場所なのである。

「女性と会うという時、わざわざタバコの匂いを付けていく馬鹿が居るのでしょうか？喫煙者ならともかく、お義兄さんは、そういった類は吸いません」

ならば、尚のこと、そのクリーンなイメージを押し出すのが恋愛

の定石では無いか？もしや、相手はタバコの匂いが好きな女性？いや、しかし、それにしてもあのオタク丸出しの恰好でタバコの匂いがする男を待っている女性など…

「…ぐふつ、まあ、いまから起こることを見ていれば分かるんじゃないすかねえ？部長…」

と、そんな謎が謎を呼ぶ意味不明な義兄の姿を見て、阿久津がゲームセンターの入口付近を指差す。その阿久津の指さす方向を見て七海は驚く。そこに居たのは、紛れもなく柏木 七海の

「あれ、部長のお姉さんでしょう？」

「パパ!？」

「ぐふええい!？」

予想外の七海の言葉に、芝居がかった血反吐の擬音を思わずただの嘔き出しにしてしまった阿久津。だが、そんな、阿久津の事など

構わず、七海はタラリとその額から一筋の汗を流す。

ゲームセンターの入口付近。そこに居るのは和屋家の旦那の嫁・和屋杏子。旦那の携帯追跡システム・GPSで場所を特定したのだろう。きよろきよろと旦那を探して辺りを見回している。そして、問題はその隣にいる人物。姉がやや青い顔をしているが、手に取るようにその気持ちが分かる七海であった。唐草模様の布に入れているが、その細長い形から、もはやそれが何であるか七海は想像できていた。ああ、場合によってはとてもマズイ事が起きる。七海は、未だ青い顔で辺りを見回す姉の隣で、憤怒の表情で唐草模様の布切れに隠した凶器を振り回している実父を見て、そう思わざる居られなかったのであった。

第13話：ヤバイ予感？（後書き）

何やら述べてありますが、流して貰って結構です（笑）

さて、メンバーが揃って来ました。旦那とその友人。七海と阿久津。そして、杏子とその父親・柏木竜ノ丞。何やらヤバイ予感？

…未だ、続くアイディアは無し。何やらヤバイ予感？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0439d/>

旦那様は、オタク様！？

2010年10月31日01時42分発行